

[別紙2]

審査の結果の要旨

氏名 河 正 子

本論文では、わが国の緩和ケア病棟に病名を知り、死をある程度意識して入院した終末期がん患者 11 例の個別的な苦痛体験の様相をグラウンデッド・セオリー・アプローチによる継続的比較分析法を用いて記述、分析し、スピリチュアルペインの構造とケアに関して以下の知見が得られた。

1. 欧米の先行研究結果から、スピリチュアリティの暫定的定義を「個人の生きる根元的エネルギーとなるものであり、存在の意味に関わる。したがって、そのありようは、個人の全人的状態、すなわち、個人の身体的、心理的、社会的領域の状態の基盤として各側面の表現形に影響をおよぼす」とした。対象者の面接内容から、この定義に照らしてスピリチュアリティに関わる多様な苦痛が体験されていることが示された。
2. 対象者のスピリチュアリティに関わる苦痛の原因として、各個人にとっての「抛りどころ」にあたる希求や願望が存在すること、その希求や願望と現実とのギャップを意識することによる苦痛が存在することが明らかになった。ギャップを意識することによる苦痛として3つのカテゴリ、「自分のあるべき姿と現実とのギャップによる苦痛」「死への過程のイメージと現実とのギャップによる苦痛」「他者との関係のあり方と現実とのギャップによる苦痛」が抽出された。
3. ギャップによる苦痛は、病状の進行とともに身体症状が重度になるにしたがって大きくなる傾向があったが、身体症状は軽度であってもギャップの意識による苦痛が大きいという逆説的な状態の事例が認められた。この2事例に共通して、緩和ケア病棟入院時の身体症状が重度で死を間近に意識した状態においては、「自分のあるべき姿として重要であった健康」に代わる抛りどころとして「死への過程の理想的なイメージ」が形成されていた。入院後の身体症状の安定によってそのイメージが崩れることによる新たな苦痛が生じたものと考えられた。
4. ギャップによる苦痛は、悲歎反応などの心理的苦痛、あるいは対人関係の変化などに

よる社会的苦痛の表現形をとりながらも、「抛りどころ」の喪失に関わる苦痛として、スピリチュアルペインを内包するものと位置付けられた。

5. ギャップによる苦痛とは異なる性質の「死が間近であるということによる苦痛」も抽出された。これは、自分自身という根源的な「抛りどころ」の喪失に関わり、激しい心理反応と渾然一体となって表出されるスピリチュアルペインととらえられた。また未来の喪失という時間存在の次元に関わる苦痛であることから、従来のケアでは対処が困難であり、対象者との時間の共有の視点が重要であると考えられた。
6. 緩和ケア臨床では、身体症状の軽重にかかわらず日常的にスピリチュアルペインのアセスメントをする意識をもってケアにあたる必要がある。個々の患者が「抛りどころ」とすることがらとギャップによる苦痛を把握することは、スピリチュアルペインの所在を明らかにし、ケアの方向性をみいだすうえで意義が大きい。

以上、本論文は欧米の先行研究とは異なる文化基盤をもつわが国の終末期がん患者のスピリチュアルペインの構造を示した点で独創的であり、緩和ケア病棟でのケアのあり方を提示した点で臨床上の有用性をも兼ね備えており、学位の授与に値するものと考えられる。